〈連載〉

文：青柳菜摘（コ本や honkbooks）

一匹の書物 Vol.02

〈ピットゥユトゥンドー〉（イルカが寄ったよ……）人間との文化史から、イルカを人的に見ること

古書店であり、アートの実践の場でもある「コ本や honkbooks」が、『文化と生物学』をテーマに、店内に眠る一冊を紹介する本連載。「キャラ」と」「腐敗」がテーマの 2 号では『ものと人間の文化史 155 イルカ（海豚）』を紹介。キャラクターとしての「イルカ」の存在について考察する。

Figure 1.『ものと人間の文化史 155 イルカ（海豚）』（法政大学出版局 ）
田辺　悟 著、2011 年刊行

あの「イルカ」が Office から消えて、もう 17 年が経とうとしている。2007 年以降にパソコンを使い始めた人をはじめ、UI が徹底されたスマートフォンに慣れた世代は、もうあの鬱陶しさを実感することはないだろう。この『ものと人間の文化史 155 イルカ (海豚)』には、もちろん Office に搭載されていたあいつのことなど出てこない。

法政大学出版局から出ている『ものと人間の文化史』は、人間との関わりを通して知ることができる「もの」をとりまく文化の要所要所を知ることができる、作家や作り手にとってはとくに興味深いシリーズだ。1968 年に一冊目の「船」が刊行されてから 2024 年現在でも新刊が出ており、50 年以上も続く長寿シリーズである。雑誌の特集や、図鑑などと異なり、一冊ごとにそれぞれの著者が行なっている研究や調査の一端が見える、まさにものと人間の文化史を体現するような書籍でもある。「もの」と言っても、「賭博」、「日和山」、「もののけ」、「人魚」..... など、捉え方は多岐に渡り、題を見るだけで、誰しも惹かれる一匹の書物を見つけることができるだろう。[1]

「イルカ (海豚)」では、とくに人間との関わり方について読んでいくことで、生き物としての倫理観について思考をめぐらせることができる。漁で捕え食べていながら、縄文時代には祀ったとみられるような文化 [2] もあり、イタリア、アイスランド、ジブラルタルではコインの図案に使用される [3] など、そのすがたを「キャラクター」として装飾に取り入れられたりもしている。クジラも同じ哺乳類として近しい存在だが、エビスやヒルコなど、人間の想像を超え、神聖化されているのがクジラだとすると、イルカはそれよりも人間と近いものとしてとらえられているということが、本書のいくつかの項目から浮かび上がってくる。

――〈ピトゥドーイ〉(イルカだよの意)、〈ピトゥドーイ〉〈ピットゥユトゥンドー〉(イルカが寄ったよ.....) [4]

「ピトゥと名護人――沖縄県名護のイルカ漁」では、名護でのイルカ漁についての引用がされているが、ここではイルカを捕えるための方法ではなく、イルカが港に「寄る」ことを知らせる合図を聞いて、村の人たちが漁を通してイルカに関わる。漁師だけでなく、子どもまでがちいさな仕事に関わることで、イルカを分け合うのだ。[5] 人と近い大きさの生き物が、海の中から現れる。魚や貝などが自然のなかで人と共存している存在だとしたら、イルカは全く異なり、外からやってきた「寄る」人、人らしきもの、と、暗に思われていたのではないか。そこではイルカを、かわいがったり神格化するのではない、人格や、存在の記号としての「キャラクター」として認めている、とも言える。

さらに、人と近い存在としてのイルカが垣間見れるのは、「イルカに乗った少年」のエピソードである。[6] イルカに乗る、というのは、ウマやラクダなど、乗り物として用途を求められる生き物とは違い、水

のなかで自由に移動できない人間がその背に乗ることで、互いにコミュニケーションをとることに意義がある。また、語られるエピソードのなかで少年はたびたび登場するが、少女の話は少ないという。それでもひとつだけ、モーリス・バートン『動物に愛はあるか』には、1955 年にニュージーランドのニュースで取り上げられた少女ジルと雌イルカのオポのエピソードが書かれている。オポが、ジルを背中に乗せて泳いだというものだ。この本では、イルカが人を背に乗せるという接触についてまでしか書かれていないが、おそらく、その人との近さから思うと、イルカと人との異類婚姻譚として想像をはたらかせることは容易であろう。

記号化された「キャラクター」には想像力がつきものだ。とくに、結ばれざるものの関係性を想像してしまう、いわゆる「腐った」考え方は、腐女子という言葉で知られるように、人間の物語をつくりあげる力がなす物である。生き物を擬人化し、人格を与え、キャラクターにしたてることや、自分たち人間のように扱うということは、イルカをはじめ「人的」な生き物がどう物語を通して人間に捉えられてきたか、という点からも、知ることができそうだ。Office についてくるあのイルカに鬱陶しさを感じていたのも、人が相手の人的な空気を察知してしまうことによる感覚である。そうした、人的で身近な、でも、海を自由に泳げないわたしたち人間が気軽に見ることができない、イルカ、という存在と人間の関係を、この本で覗き見るのはどうだろうか。

注釈

[1] 法政大学出版局「ものと人間の文化史」ウェブページ
https://www.h-up.com/e/?Genre=&Series=S13&flg_searchmode=shousai&ORDERBY=DateShuppan&ORDERBY2=DateShotenhatsubai&SORTORDER=DESC&action_search_do=true
[2]『ものと人間の文化史 155 イルカ (海豚)』 法政大学出版局、2011 年、「イルカを祀った縄文人」p.14
[3] 同上、「貨幣の中のイルカ」p.154
[4] 同上、「ピトゥと名護人（ルビ：ナグンチュ）――沖縄県名護のイルカ漁」より、名護博物館編「ピトゥと名護人」（谷川健一編『鯨とイルカの民俗』所収・日本民俗文化資料集成）からの引用 p.91
[5] 同上、p.97
[6] 同上、「イルカに乗った少年」p.137

コ本や honkbooks

2016 年 6 月より活動するプラクティショナーコレクティヴ。映像や書籍の制作、展覧会やイベントを企画するメディアプロダクションとしても活動する。活動拠点として「コ本や honkbooks」を運営し、プロジェクト・スペースとして「theca（テカ）」を併設する。青柳菜摘／だつお（アーティスト）、中島百合絵（企画制作ディレクター）主宰。2023 年 4 月に拠点を神楽坂に移転し、書店兼プロジェクト・スペースと

してグランドオープンした。

住所：東京都新宿区山吹町 294 小久保ビル 2 階

開館時間：12:00〜20:00

休業日：火

http://honkbooks.com/